Weekly Focus

ロープ高所作業 専門事業者6社が公開訓練

TOKYO INDUSTRY（東京都豊島区）

ロープ高所作業事業者ら６社は10月25日、「公開レスキュー訓練TOKYO　INDUSTRY」を開催した。ロープに吊られてビル外壁の補修・修繕作業に従事している際、同僚が熱中症や脳卒中に見舞われたら、どう救助するのか……。東京都内の８階建てのビルを舞台に、約20人のメンバーが３種類のシチュエーションに臨んだ。救急隊員に引き渡すまでの行動フローを体験する訓練は、現役の消防士と一緒に台本をまとめている。今後の業界の安全活動に寄与すべく、救助活動の基本的な手順だけをまとめたレスキューカードも作成している。

熱中症の同僚助ける

救急搬送に繋ぐ手順学ぶ

ロープ高所作業は、高さ２m以上で作業床を設けることが困難な場合に、労働者が昇降器具を用いて身体を保持しつつ行う作業をいう。2016年に労働安全衛生規則に定められ、当該作業に従事する際は特別教育の受講が義務付けられた。建築物の維持・修繕をはじめ橋梁の点検、風力発電などでも行われており、足場を設けるスペースを確保し難い都市部でも近年、需要が高まっている。

作業員はロープに吊られてシーリングや塗装に従事するため、身体を保持する器具を身に着け、手元の操作で自ら昇降を行う。体調不良などで方が一にも操作ができなくなった場合、地上へ降りたり安全な場所へ移動するためには、同僚の助けを借りるしかない。救助する側には119番通報して状況を伝え、駆け付けた救急隊員に引き渡すまでの役割が求められる。

降下作業と共に119番通報も

公開レスキュー訓練では、いざというときに速やかに救助をこなせるよう、異なる3つのシチュエーションで一連の作業を体験した。午前中はビル正面の外壁（カーテンウォール）と、隣のビルと接した狭い妻面を舞台とする2つの訓練が行われ、計5チームが同時進行で順に取り組んだ。午後には裏面にある外階段を使って、代表チームがより高度なレスキュー訓練に挑戦している。

たとえばビル正面の外壁で行われた訓練は、作業員A、Bの2人がビル外壁のシーリング作業に従事していたところ、Aが熱中症を発症したというもの（**写真上**）。参加メンバーは屋上にいるC、Dを含む4人で、20分間のうちに意識が朦朧としているAを地上へ降ろし、救急隊へと引き渡す。

まずはAの異変に気付いたBが、トランシーバーで屋上にいる2人に連絡。Cが119番通報する一方で、Dは冷却用品や救急用品を持って地上へ向かう。

通報担当のCは、災害救急情報センターの指令員役と話し、現場の住所、自分の名前と電話番号、Aの状態について伝える。指令員役から「地上まで降ろすことはできますか?」と問われたら、訓練を受けた作業員が救助していることを告げ、万一に備えて救助隊の派遣も要請する。

一方で現場のBはAに声を掛けつつ、自身とAの昇降器具を慎重に操作して降下していく。地上でC、Dと合流したら、Aを寝かせて介抱する。Bは会社へ報告し、元請やビル管理会社、Aの家族への連絡について相談。Cの電話には出動した救急隊から折返しの連絡が入るので、Aの状態を伝え、そのまま通話して誘導まで担当する。通報から8分後、到着した救急隊員らに事情を説明して、状況を引き継ぐ――。

当然のことながら119番通報や救急搬送は実際に行うわけではないが、一連の作業は可能な限り現実に近い形で実施している。午前中のもう1つの訓練は、塗装作業中に脳卒中ないし心筋梗塞が疑われる状態になったという設定で、作業員役2人は塗料の入った一斗缶（10㎏）を腰に下げたまま、救助作業に挑んだ（**写真下**）。午後には2人の救助者が連携して行うさらに困難なプログラムについて、代表チームのほかTOKYO〝ONE－R〟CLUBが実演している。

消防の監修得て行動フロー確立

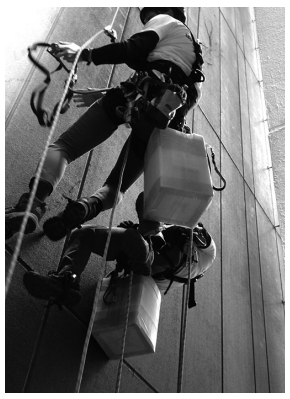
公開レスキュー訓練は元々、日本ロープ高所作業協会会員でもある日本空系㈱（岩手県一関市、伊藤徳光代表取締役社長）が自社で訓練を始め、さらに会社の垣根を越えて学び合いの場をつくりたいとの想いからスタートした。同県内で2017年から開催しており、今年で10回目を迎えている。ただ、同社は橋梁点検を主に行っているため、訓練も震災遺構での自然環境が中心だった。今回のイベントは、その想いを継いで実行委員長を務めた上田雅人・㈱4U代表取締役が「都市型で、自分たちの現場（＝ビル外壁）でもやってみたい」と考え、周囲の企業にも声を掛け、2年間かけて準備を進めたもの。当日は日本空系の伊藤代表も駆け付け、訓練の一部始終を見学している。

日本ロープ高所作業協会の代表理事でもある上田代表は、「ロープレスキューの訓練自体は多くの会社がやっている。ただ、救助が先なのか、119番通報が先なのかといったマニュアルがなかったので、たぶん災害時には迷ってしまう」と話す。「それをあらかじめ訓練しようと思って、今回の訓練の台本は消防士さんと一緒につくった」。

自分たちで救助活動を行うことの是非についても、「しっかり訓練をしている技術者であれば問題ない」と改めてお墨付きをもらった。訓練を通じて救助隊を待たずにいち早く仲間を助ける一方、念のため出動自体は要請する手順を明確にしている。

今回つくった台本は、ある意味で今後もマニュアルとして機能する。基本的な行動フローだけをまとめてレスキューカードも作成し、裏面には通報時に伝えるべき言葉を刻んだ。常に作業員たちに携行してもらい、いざというときに役立ててもらう。


意識朦朧とする同僚と共に地上へ


塗装作業時は重量も…

ビル外壁舞台に3種の状況体験

ビルの3～4階付近、外壁を修繕するシーリング作業に従事していた作業者Aは、突然、自分の意識が遠のいていくのを感じた。「Aさん、大丈夫ですか！　聞こえますか！」。同僚Bの呼び掛けを耳にしたが、うまく応えられない……。

東京都豊島区にある8階建てビルで行われた公開イベントでは、作業中に体調不良に見舞われ、自力では動けなくなった作業員を救急隊に引き継ぐまでのレスキュー訓練が行われた。3種類用意した訓練メニューに、総勢20人のメンバーが挑んでいる。

訓練に参加しイベントを共催したのは、㈱4U（東京都清瀬市）、㈱尊氏技工（埼玉県川口市）、㈱TCS（東京都練馬区）、㈱明誠（東京都東大和市）、㈱MAS（東京都武蔵野市）、㈱マイスターアソシエイツ（東京都板橋区）の計6社。ビル外装クリーニングを主事業とする㈱マイスターアソシエイツ以外は、建設業者となっている。さらに東京消防庁の有志団体TOKYO〝ONE－R〟CLUBが、訓練の台本の監修や救急隊役で協力した。

（C）労働新聞社　無断複製転載を禁じます。